

## 西国第十六番 音羽山

御本尊／十一面千手千眼観世音菩薩 開基／延鎮上人

## 北法相宗 清水寺

## 慈悲の道

音羽山清水寺貫主 森 清範

新しく親しい人と巡り合うのは人生の楽しみの一つです。「若くて元気のいい人やなあ」「背が高く格好いいなあ」。この前もそんな素敵な人に出会いました。でも、ちょっと気を付けないといけません。「若い」「背が高い」というのは全部「私」と比べて見えています。ひよっとすると自分にとって「味方か」「敵か」と、失礼にも考えてしまいかねません。これでは争い

や対立はなくなりません。現に世界には分断と戦争が絶えませんが。それでは観音さまはどのような見ているのでしょうか。観音さまは観世音菩薩といえます。これは「アバローキテーシユバラ」というサンスクリット語を鳩摩羅什尊者が『法華経』で訳されたものです。『般若心経』では玄奘三蔵法師が観自在菩薩とされています。どちらも非常

にきれいな訳であります。自由自在に「世音」を「観る」ことができる菩薩さまということですね。「世音」すなわち「音」とは何かといえますと、私を取り巻く環境一切をいいます。「観る」のは私、つまり「観」と「音」とは主観と客観ということになります。私たちはなかなか自由自在に観ることができません。それが観られるのが観音さまです。観る方と観られる方が一つになる、主体と客体が一体になるのです。そこに心が通じ合うものが出てきます。

ある本に小学生の友だちの話が出ていました。とても仲良しの女の子です。庭で遊んでいたら、一人が穴に落ちました。もう一人はびっくりして先生を呼びに行き、「先生、○○ちゃんが高い穴に落ちました。はよ助けて」と言いました。すぐ先生が助け事なきを得ました。あとで、ある先生が「高い穴はおかしいね。深い穴や」と言ったのです。すると担任の先生は「二人は仲よし、気持ちを通じ合い、落ちた子の気持ちになって穴を見上げていたので、これで正しい」と話し、先生たちは納得しました。「自」と「他」、主体と客体が一体になっていたのです。

西国三十三所観音巡礼は三十三の観音さまと出会う旅です。自由自在に観て周りの心に寄り添い「自他一如」となる観音さまの心に触れていただきたいと思えます。

